

地域の一員としてあなたができること

大地震が発生したとき、多くの人々が救助を求める事態になります。建物の倒壊、火災の発生、道路の損壊などの被害が広範囲に及ぶことが予想され、警察や消防がすぐに救助に駆けつけられるとは限りません。

高校生のあなたが自らの命を守ること（自助）はもちろん、地域の一員としてできることを考えてみましょう。

1. 震災時に発揮された地域の力

防災対策の基本は、三つあると言われています。

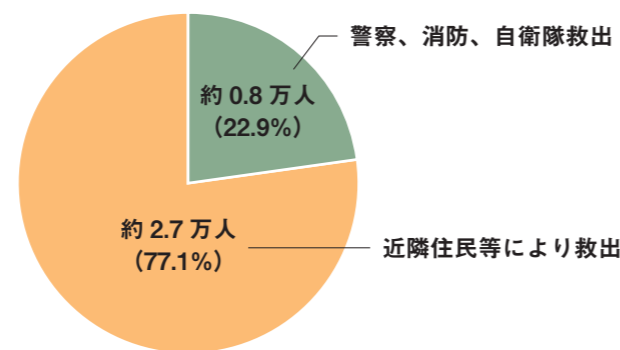
- ①自助…自分の命や財産を自分で守ること
- ②共助…地域や身近にいる人同士が協力し助け合うこと
- ③公助…国や地方公共団体が支援すること

行政の対策「公助」には限界があることから、県民一人ひとりが自分の命や財産を自分で守る「自助」、地域で助け合う「共助」をうまく連携させることで、防災対策は効果を発揮することができます。

大規模な災害が発生すると、道路の損壊で通行できなかったり、路上に停めた自動車などで道路の交通事情が混乱します。また、同時に多発する火災への対応から、消防をはじめ公的な防災関係機関の活動能力は著しく低下します。①のように阪神・淡路大震災では、家屋の倒壊により閉じ込められた人のうち、約8割が警察、消防、自衛隊による救助ではなく家族や近所の住民によって救出されたという調査報告があります。

震災直後の人命救助や初期の消火活動では、近隣住民の協力が大きな役割を果たすことになります。

① 阪神・淡路大震災時における要救助者約3.5万人の救出方法



(備考) 1.河田恵昭「大規模地震災害による人的被害の予測」(自然災害科学 Vol.16 No.1) および内閣府「防災白書」(2003年版)により作成。
2.阪神・淡路大震災で倒壊した家屋などの下敷きになって自力で脱出できなかった人の救出方法を推計したもの。

(出典：内閣府平成19年度版 国民生活白書)

阪神・淡路大震災では

震源地にほど近い淡路島の旧北淡町（現在 淡路市）では、震度7を記録し、多くの人々が倒壊した建物の下に生き埋めになりました。しかし、日頃から住民同士がお互いのことをよく知っていたため、いち早く住民で組織された消防団は地域住民と協力し、がれきに埋もれている人の位置を正確に推定し、速やかな救助を行いました。その後、警察や広域消防と協力し、約300人も人命を救いました。

阪神・淡路大震災は、「日常生活における人々の交流は、ふだんの暮らしを豊かにするというだけでなく、災害時に人の命を救う上で大きな力を発揮するという意味でも重要である」ということを再認識する契機となりました。



救出活動する消防団員
(1995〔平成7〕年1月17日 旧北淡町)

2. 災害時に発揮される高校生の力

高齢化が進んでいる地域や、日中は勤務のために若い人たちがいない地域があります。そのため、平日の昼間に地震が発生した場合、救出の要となる地域の力が十分に発揮できない可能性があります。地震などの自然災害が、あなたが学校にいるときに発生したら、地域の一員として何ができるのでしょうか。県内の高校生が取り組んでいる事例を通して考えてみましょう。

地域住民とともに防災訓練

県立篠山東雲高等学校

～生徒が避難時の援護者になろうとしている取り組み～

平日の昼間、篠山市の農村部に位置する県立篠山東雲高等学校周辺の住民は、多くが高齢者です。一人で暮らしている、あるいは自分一人の力では避難できない方もいます。このような地域に立地する同校では、震度5強の地震発生を想定し、地域連携避難訓練を高齢者とともに実施しました。

「避難誘導班」の生徒は、自力避難が困難な地域住民を自宅まで迎えに行き、避難所である高校まで車椅子で搬送したり、視覚に障害のある人の手を引いて誘導したりしました。

「避難者受け入れ班」の生徒は、校門や体育館入り口付近に立ち、自力避難住民を体育館へ誘導しました。

そして、「名簿作成班」の生徒は、地域住民約90名の名簿を基に避難住民の確認を行いました。



目の不自由な人の避難を手伝う生徒
(写真提供 神戸新聞社)

参加した地域住民の声

- 「高齢者が多い地域なので、若い子がいるだけで頼りになる。」
- 「高校の催しなどでの交流はあったが、防災訓練は初めて。高齢者が多く、自力で避難できない人がいる中、若い人がいるのは心強い。」

参加した高校生の声

- 「誘導する際、住民の方にもっと積極的に声をかければよかった。」
- 「地域の方に避難所の場所を聞かれ、本当の震災のように対応することができた。」
- 「災害が起こったとき、どのような状況になっているかわからない。予想外のことが起きたとき、自分がどのように行動を取ればいいのか考えることができた。」
- 「地域の方をきちんと誘導することができ、皆さんにスムーズに行動していただいた。」

地域合同防災避難訓練

県立東灘高等学校

～地域防災の拠点としての機能を担う学校の生徒の取り組み～

災害に備え避難所指定を受けた東灘高等学校がある地域は、南海トラフ巨大地震が発生した場合、4mの津波が来ることが予想されています。そのため地域防災の拠点としての機能を高め、災害に対する地域の防災力を高めることを目的に、近隣の企業12社、神戸市東灘消防署、神戸市消防団、深江南ふれあいのまちづくり協議会、深江南町二丁目自治会と合同で防災避難訓練を実施しました。

訓練当日は、震度7の地震が発生し、津波警報が発令されたという想定で、生徒は津波に備えた垂直避難の訓練を実施しました。その後、全校生徒が①避難所開設受付訓練、②防災会議参加体験、③煙体験、④応急手当訓練、⑤心肺蘇生法訓練、⑥担架救護訓練、⑦初期消火訓練、⑧ヘリポート設営訓練、⑨情報収集・伝達訓練に分かれて、活動しました。地域自治体や行政などの関係者で実施された防災会議では、生徒会が司会を務めるなど、参加した生徒からも地域防災に関する意見発表が行われました。



防災会議参加体験



担架でのけが人救護



避難所開設受付訓練

参加した地域住民の声

「地震による災害でライフラインが止まり、救援物資で日々の生活を送らなければならない場合には、物資の受け入れ拠点が東灘高校になることも想定されます。その救援物資を在宅被災者（高齢者）に運ぶ役割に東灘高校生が関わってくれることは、とても心強いことです。そのためにはどの家にどんな人が住んでいるのかを知る必要がありますが、日頃から、清掃活動や季節の行事（夏祭りや餅つき）等で交流を図り、住民と高校生とが関わることで地域を把握してほしい。自治会の役員会の構成も高齢者がほとんどなので、高校生の動きは私たちにとって大きな力です。」

参加した高校生の声

- 「担架でのけが人救護や避難所の開設、ヘリポートの設営訓練など、実際にいろんなことが経験できたので、地震のときに役立てるようにしたい。」
- 「今回の訓練で学んだことを地震のときに役立てるためには、普段からしっかり訓練をしておかなければいけないと思った。」
- 「災害のときには、自分が助かるだけでなく、今回学んだことを生かしてけがをした人を助ける側の役割を果たしたい。」
- 「企業の方や地域の方と一緒に防災訓練をして自分たちのできることがわかった。」
- 「地震が起きたとき災害を少しでも減らすためには、学校だけでなく地域との協力が大切であることがわかった。」

災害被害からの復旧・復興支援活動

県立佐用高等学校

～地域の一員として町の復興に役立とうとする取り組み～



町内の溝掃除に取り組む生徒たち

2009（平成21）年8月、佐用高等学校がある佐用郡佐用町は、台風第9号による豪雨で甚大な被害を受けました。このとき、佐用高等学校の生徒たちはすぐに、「自分たちにできることをしたい」と町の復興に立ち上がりました。土砂の片付けなど約1週間の復旧活動に、教師・生徒合わせて延べ500人が参加しました。

地域の除雪作業

県立村岡高等学校

～地域の課題を見つけ役立とうとする取り組み～



除雪作業に取り組む「村高除雪隊」の生徒たち

住人が高齢化し、自力での除雪が困難な家や集落が目立つ中、村岡高等学校の生徒が町内各所で除雪に汗を流し、多くの方に喜ばれています。

生徒有志で組織する「村高除雪隊」が出動し、福祉施設などの除雪を行いました。地域の方には「村高除雪隊の応援があり、とても助かった」と喜ばれ、参加した生徒は「自分たちの活動が地域の方に喜ばれるのがうれしい」と語っていました。

3. 地域の人々を災害から守る

各地域では災害時に備えて防災訓練などを実施していますが、地域の防災組織が災害時に機能するためには、日頃から人間関係を構築できていることが重要です。

ここに示した事例のように地域の中で自分たちのできることを考えて実践することで、地域の方々の声を直接聞き、その思いを肌で感じることで地域の一員としての自覚を高めていくことになるのではないのでしょうか。

阪神・淡路大震災では住宅が全壊して避難所に避難した高校生以上の男性の中で、その後の救助活動に参加した人は約30%しかいませんでした。動ける人が救助活動に参加すれば、もっと犠牲者を減少させることができるのではないのでしょうか。

そのためにもあなたは、地域の災害特性を知り、災害時には率先した避難行動と、自分の身を守りながらも地域住民と協力した防災活動に取り組むことができるようにしていきましょう。